

神奈川県に於ける小児慢性特定疾患の現状分析 (分担研究：小児期の慢性疾患の実態把握システム化に関する研究)

岩 本 弘 子

要約：横浜市と神奈川県域の小児慢性特定疾患の医療給付台帳にもとづく調査を、悪性腫瘍、血液疾患、内分泌疾患につき行った。悪性腫瘍と内分泌疾患では、市と県域ではほぼ同数に近く、人口当りの頻度は市で高い傾向を見た。医療機関とのかかわりは、悪性腫瘍で専門医のいる地域大学病院へ集中する傾向があり、急性・亜急性経過をとる予後良好な血液疾患では地域主要病院に分散していた。専門医がおり包括医療の行われる小児病院へは地域をこえて悪性腫瘍・慢性血液疾患の集中をみた。

見出し語：小児慢性特定疾患，横浜市，神奈川県，小児病院

【研究目的と方法】神奈川県に於ける小児慢性特定疾患の頻度，地域分布，専門医療機関とのかかわりの実態把握を目的とし，昭和63年度の医療給付台帳による調査を行った。政令指定都市である川崎市と横浜市のうち川崎市を除き，横浜市と県域について悪性腫瘍，血液疾患，内分泌疾患を選び調査し比較検討した。これらの疾患は，ある程度以上の有病率があり，年次や季節による発症頻度の変動が少く，育成医療など他の医療給付制度の影響が少く，長期の高額な医療を要するため申請もれが少いと予想される等より，慢性疾患の地域分布や医療機関とのかかわりをみるのに適していると考えた為である。

医療給付台帳は，プライバシー保護のため短時間の閲覧のみが許可されたため，同一人に対する異なる医療機関からの複数の申請や，申請時期が前年度とずれ翌年度の申請更新が年度内に行われたための重複例が数%程度あるものと予想されるが，いずれも除外されていない。実人数とは多少のずれが考えられる。

【結果】昭和63年度の小児慢性特定疾患の給付件数と人口との関係を表1に示した。63年度の疾患区分毎の件数は得られず，参考資料として62年度の横浜市の疾患区分毎の件数を表2に示した。人口10万当りの件数は，昭和58年度に加藤らの調査で最も高い頻度を示した大阪の138.5件をはるかに上

神奈川県立こども医療センター 神経内科

Division of Pediatric Neurology, Kanagawa Children's Medical Center

回っている。横浜市は県域に比べ、人口比（20才未満人口比でも）でも頻度が高く、都市での申請が多い傾向を示した。

次に、疾患の地域分布と医療機関とのかかわりを見るため、図の如く神奈川県を川崎市と横浜市の政令指定都市と、その他の県域に大別した。県域は保健所管轄地区を考慮し、便宜的に、三浦半島、湘南、県央・北湘、西湘地域に大別した。医療機関では、県立の小児病院が横浜市南部にある。4つの大学病院が横浜市（市立A大学病院）、川崎市（C大学病院）、湘南地域の伊勢原市（J大学病院）、県央の相模原市（L大学病院）にそれぞれ分散し、横浜市北・西部にさらにB大分院と新しいC大分院がある。

悪性腫瘍、血液疾患、内分泌疾患の地域分布を表3に示した。悪性腫瘍と内分泌疾患は、横浜市と県域でほぼ同数となり人口比では市域で高い頻度を示した。一方、アレルギー性紫斑病は県域の申請が多く、血友病でも同様の傾向がみられた。血友病では、日常の血液製剤の補充療法は近くの地域病院で受け、合併症や定期健診は大きな総合病院や小児病院を受診する傾向にあり、複数の病院からの申請の重複が県域に多い可能性が想像される。

表4に、疾患の性質による地域医療機関とのかかわりを見てある。悪性腫瘍として白血病を選んだが、発病初期に高度な専門的な入院治療を要

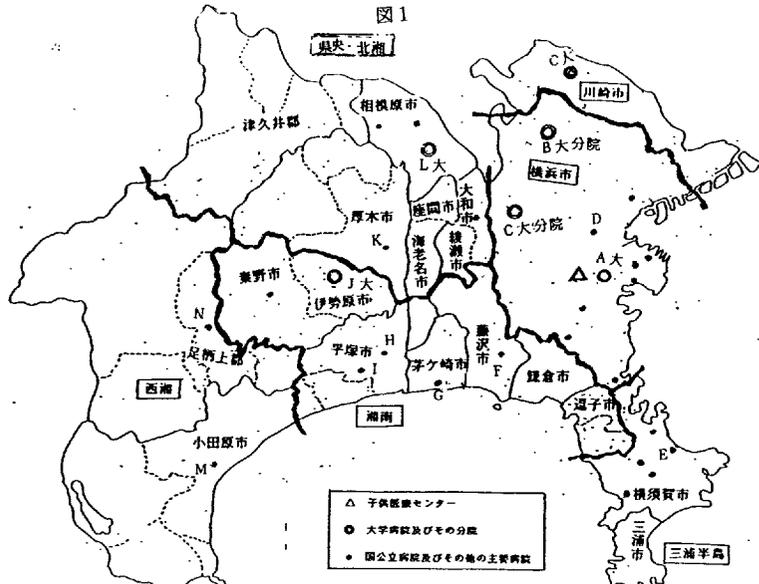
表1 昭和63年度小児慢性特定疾患給付件数と20歳未満人口*

	横浜市	川崎市	神奈川県 (含横須賀市)	計
給付件数	7,347	1,992	5,942	15,286
全人口	3,151,087	1,142,953	3,494,086 (431,192**)	7,788,126
20歳未満人口*	843,337	292,128	991,163 (116,268**)	2,126,628

*昭和64年1月1日現在
**横須賀市

表2 昭和62年度横浜市疾患別給付件数

総数	7151
01 悪性新生物	532
02 腎臓	997
03 喘息	1033
04 心臓	1520
05 内分泌	560
06 膠原病	2004
07 糖尿病	133
08 先天代謝異常	164
09 血友病等	208



し寛解後も数年に亘り定期的な維持療法と経過観察が必要である。慢性の血液疾患の血友病は生涯にわたり医療の必要があり。時に合併症により入院治療も必要となり医療とともに療育指導も必要である。アレルギー性紫斑病は急性・亜急性経過をとり比較的前後良好な疾患である。

白血病では、横浜市の患者は17%が東京で治療を受けている。その他の殆んどが市内の小児病院とA大病院へ集中し、県域の大学病院にはほとんどかかっていない。一方、県域では、県央のL大病院と湘南北部のJ大病院の近辺の患者はこの2大学病院へ集中する傾向があるものの、この地域の一

部や他の地域の患者は横浜市内の小児病院やA大病院へも流入していた。

血友病は、市域の約半数が小児病院へ集中し、

表3 横浜市および県域に置ける悪性腫瘍・血液疾患・内分泌疾患の件数

地域*	横浜	三浦半島		湘南				県央・北湘				西湘		県域	
地区**	横浜市	横須賀市	三崎地区	鎌倉地区	藤沢地区	茅ヶ崎地区	平塚地区	秦野地区	厚木地区	大和地区	相模原地区	津久井地区	小田原地区	足柄上地区	計
人口 (20歳未満人口)	3,151,087 843,337	482,748		1,378,645				1,280,624				352,069		3,494,086 (991,163)	
悪性腫瘍	562	65	7	55	59	48	47	31	63	30	78	12	36	25	556
白血病	188	24	2	18	14	10	15	9	27	11	24	6	12	10	182
悪性リンパ腫	39	3	0	0	2	1	5	3	4	0	2	0	1	1	22
細網内皮腫	8	0	0	1	1	2	0	0	1	2	0	0	0	0	7
ホジキン病	8	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	3
組織球症	2	1	2	0	3	0	1	0	0	0	3	0	0	0	10
脳腫瘍	123	15	0	12	13	20	12	6	19	4	25	2	5	2	135
神経芽腫	38	3	0	2	9	0	2	3	0	5	5	0	5	2	36
網膜芽細胞腫	23	0	0	2	7	3	4	0	3	1	4	1	1	0	26
ウィルムス腫瘍	22	3	0	3	0	1	2	1	3	3	1	1	0	0	18
骨腫瘍	16	6	1	4	1	4	2	2	1	0	1	1	2	0	25
肝腫・肝芽腫	10	2	0	1	0	2	0	1	0	0	4	0	1	1	12
軟部悪性腫瘍	14	2	2	4	3	1	3	1	1	0	3	0	3	3	26
生殖器腫瘍	14	1	0	5	3	2	0	1	1	0	3	0	6	0	22
神経繊維肉腫	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
黒色腫	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
心臓腫瘍	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
クローム親和性腫瘍	1	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
胚芽細胞腫	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	2	5
その他の肉腫性悪性腫瘍	11	0	0	0	0	1	1	1	2	1	0	0	0	0	6
その他の悪性新生物	31	3	0	2	3	1	0	2	0	0	2	1	0	4	18
血液疾患	386	55	6	20	35	45	62	42	51	32	60	5	31	16	460
血友病	111	22	3	7	11	10	19	17	18	10	21	3	24	4	169
フォン・ウィレブランド	11	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	2	0	5
その他の凝固障害	10	1	0	0	0	0	0	1	2	0	3	0	0	0	7
血小板減少性紫斑病	14	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	3
血小板無力症	8	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	4
自己免疫性貧血	12	2	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	4
自己免疫以外の溶血性貧血	30	5	0	1	1	1	1	1	0	0	9	0	0	0	19
赤芽球性貧血	5	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
無顆粒球症・顆粒球減少症	23	1	1	2	1	0	3	2	3	3	1	1	0	0	18
カサバハ・メリット	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
アレルギー性紫斑病	160	21	2	10	22	33	37	18	26	18	25	1	4	12	229
内分泌疾患	551	89	6	55	48	47	56	19	78	36	62	13	31	15	555
下垂性小人症	155	23	1	15	11	7	17	5	26	15	18	2	8	1	149
クレチン症	90	14	0	6	3	9	6	0	13	0	5	0	0	0	56
バセドウ氏病	92	25	2	13	10	9	8	4	9	11	10	3	9	5	118
甲状腺腫	8	1	1	2	2	0	3	1	3	0	3	2	1	0	19
甲状腺炎	22	1	0	2	0	0	5	1	1	1	0	0	0	0	11
先天性副腎過形成	35	3	0	2	3	2	2	3	4	0	4	3	5	3	34
性腺機能低下	40	7	1	7	3	5	3	3	2	0	1	0	1	3	36
ターナー・ブラナー・ウイラー	17	4	0	0	1	0	0	1	5	0	8	1	1	0	21
思春期早発症	54	7	0	4	7	12	5	1	7	2	7	2	1	1	56
尿崩症	10	4	1	1	1	0	0	0	1	1	3	0	1	2	15
クッシング、副腎腫	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
副甲状腺機能低下	10	0	0	1	1	2	0	0	0	2	0	0	0	0	7
副甲状腺機能亢進	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
甲状腺機能低下	0	0	0	0	4	1	3	0	6	4	1	0	2	0	21
その他の内分泌疾患	11	0	0	2	2	1	2	0	1	0	2	0	2	0	12

*[4]参照
**各保健所管轄地区

県域からもかなりの数が小児病院へと流入していた。アレルギー性紫斑病は、大学病院や小児病院には少く、地域病院に分散していた。

表4 白血病・血友病・アレルギー性紫斑病の地域分布と12区医療機関との関係

地域	横 浜 市			東 京 (含横浜区市)			三浦半島			湘 南			横浜・北湘			西 湘							
	白血	血友	紫斑	白血	血友	紫斑	白血	血友	紫斑	白血	血友	紫斑	白血	血友	紫斑	白血	血友	紫斑					
疾患別	白血	血友	紫斑	白血	血友	紫斑	白血	血友	紫斑	白血	血友	紫斑	白血	血友	紫斑	白血	血友	紫斑					
件数合計	188	111	160	182	169	228	26	25	23	32	18	32	34	46	84	68	52	69	22	28	16		
区	東京	32	3	3	20	19	0	3	2	0	1	1	0	2	3	0	13	10	0	1	3	0	
	川崎	6	12	32	1	1	2	0	0	1	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	
	横浜市 こども医療センター	51	45	5	28	33	3	8	6	1	8	8	1	8	10	1	3	7	0	1	2	0	
	A 大学病院	42	21	5	20	3	0	3	1	0	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	B 大学病院分院	16	11	7	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	
	C 大学病院分院	1	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	D 市民病院	11	2	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	E 市民病院	22	12	80	2	4	6	2	1	2	0	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	その他																						
	三浦半島	1	0	1	6	12	10	6	12	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
E 病院	0	2	0	3	3	9	2	3	8	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
その他																							
横浜	湘南																						
	F 市民病院	1	0	0	9	8	21	1	0	0	7	4	20	1	3	0	0	1	1	0	0		
	G 市民病院	0	0	0	9	6	26	0	0	0	0	0	0	0	6	26	0	0	0	0	0		
	H 市民病院	0	0	0	1	2	3	0	0	0	1	0	0	0	2	9	0	0	0	0	0		
	I 共済	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	19	0	0	0	0	0		
	J 大学病院	1	2	0	29	24	19	1	0	0	0	0	0	18	14	10	8	7	5	2	3		
	K 大学病院	1	0	0	5	5	26	0	0	0	3	0	4	2	5	22	0	0	0	0	0		
	その他																						
横浜・北湘	K 県立病院	0	0	0	2	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	18	0	0	0		
	L 大学病院	2	0	0	25	13	15	0	0	1	2	0	0	0	0	23	13	14	0	0	0		
	M 大学病院	0	0	1	18	11	32	0	0	0	0	0	1	0	0	18	11	31	0	0	0		
	その他																						
西湘	M 市民病院	0	0	0	8	17	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	8	16		
	N 県立病院	0	0	0	1	4	10	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	1	2		
	O 県立病院	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	その他																						
他県	2	1	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0		

● 白血病 ●● 血友病 ●●● アレルギー性紫斑病

【考案とまとめ】①神奈川県の小児慢性特定疾患の申請件数は、人口10万人当たり196.3と高い頻度であり、横浜市で県域よりも多かった。②比較的子後良好なアレルギー性紫斑病は地域病院に分散し、高度な専門的治療を要する白血病は大学病院や小児病院に集中していた。慢性で長期の医療と合併症の管理が大切な血友病は、地域をこえて小児病院に集中する傾向があり、よりきめ細い包括医療や生活指導など患者の要求に合った対応が小児病院でなされているためと考えられた。③小児慢性特定疾患の給付台帳にもとづく調査は、重複例の除外が可能であれば、これら慢性疾患の大きな疫学調査と実態把握に極めて有効な方法と考えられた。より精密な実数の把握には、疾患分類

や診断基準の統一が必要と考えられる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:横浜市と神奈川県域の小児慢性特定疾患の医療給付台帳にもとづく調査を,悪性腫瘍,血液疾患,内分泌疾患につき行った。悪性腫瘍と内分泌疾患では,市と県域でほぼ同数に近く,人口当りの頻度は市で高い傾向を見た。医療機関とのかかわりは,悪性腫瘍で専門医のいる地域大学病院へ集中する傾向があり,急性・亜急性経過をとる予後良好な血液疾患では地域主要病院に分散していた。専門医がおり包括医療の行われる小児病院へは地域をこえて悪性腫瘍・慢性血液疾患の集中をみた。